

【論文】

近世石工の基礎的研究 1 —高野山奥之院と住吉大社—

関根 達人

はじめに

我が国の石造物研究は美術史の分野からスタートしたが、中世文書は数が限られており、極めて乏しい地域も存在することから、今日では中世史研究の一環として各地で石造物の調査が行われるようになった。一方、江戸時代には墓石が普及するとともに、人々が石に自らの想いや願いを刻むことが流行し、様々な石造物が作られたが、近世文書同様、膨大かつ多様性に富む近世石造物は、歴史資料として未だ十分認知されていない。

江戸時代に庶民層にまで広がった石造物文化は、明治以降も今日に到るまで引き継がれており、近世と近現代を繋ぐ歴史の経糸の一つといえる。石造物は「石に刻まれた歴史」であり、「紙に書かれた歴史」である古文書や、「大地に埋もれた歴史」である考古資料とともに、江戸時代を知る上で重要な歴史資料と考える。

中世の石造物と近世の石造物の最大の違いは、刻まれた文字情報量の多寡であろう。近世石造物には紀年銘をはじめとして様々な文字情報を伴うものが多い。それら文字情報の中で、紀年銘に次いで注目されるのが、製作者を示す石工銘である。近世の史資料は多様だが、紙媒体の史料を除けば、作者の名前がある程度普遍的にみられるのは、刀剣類や梵鐘・石造物などの金石文資料に限られるのではなかろうか。石工銘のある中世の石造物は大変少なく、石工銘は近世石造物の特長の一つにもなっている。

石工銘から導かれる生産地と消費地を結ぶ流通は、石造物による歴史研究の重要な方向性の一つといえる。よく言われるように、重量のある石材や石造物は、船底に積み船体を安定させるバラストの役目を果たすため、船荷として遠隔地まで運ばれるケースも多く、広域流通品にもなっている。生産遺跡である窯跡出土品と消費地遺跡出土資料の対比が可能な陶磁器に対して、生産遺跡の情報に乏しい石造物はこれまで流通に関する研究が十分行われてこなかった。石工銘と石材を手掛かりとして、石造物の流通を解明していく必要がある。

1. 石工研究の現状と課題

石工に関する古文書は非常に数が少ないため、石工の研究は、石造物を対象とする考古学的アプローチと、聞き取りを中心とする民俗学的アプローチを中心に研究が進められてきた。後者の代表

例としては金森敦子氏による一連の研究(金森1978a・1978b・1979・1980・1983・1985)が挙げられる。

石造美術研究の分野では古くから石工銘には十分な注意が払われてきた(川勝1939)。1978年には日本石仏協会内に石工研究部会が作られ、機関誌『日本の石仏』8号の石工に関する特集で、栃木県南河内町(現下野市)にある大工伴宗安と小工楊侯行真作元久元(1204)年銘宝塔を最古とする石工銘を有する全国の中世石造物166基の集成(望月1978)や、近世京石工の石造物157基の集成(佐野1978)が発表された。結成10年目にあたる1987年には『日本の石仏』43号で「石屋と石材」が特集され、2002年にも104号で再び「石工再考」の特集が組まれた。

近世の石工には、石材産地に伴う在郷石工と石材産地から離れた町石工とがあり、加えて信州伊那・高遠石工(大塚1977・1978、小松1978・1979、大村1978・1979・1983、小滝1978、植松1979、春日1981、山之内1982、高遠町教育委員会編2005)に代表される出張製作に関わる出稼ぎ石工も存在した。また、江戸石工には、石碑に字や彫刻を彫ることを専門とした字彫り石工も存在したことが知られる(嘉津山2000a・2000b・2001・2003・2004・2007a・2007b・2016、加藤2003)。さらに、同じ産地でもミヤモノと呼ばれる鳥居や狛犬などを製作する石工と、カタモノと呼ばれる石塔類を製作する石工に分かれる場合もあった。

近世に活躍した石工集団のなかでも、石材に適した和泉砂岩の産出地の一つである和泉国日根郡一帯を本拠とした泉州石工はとりわけ歴史が古く、出稼ぎや移住を通して各地の石工に大きな影響を与えた(金森1980、田中井2007a・2008)。また、大坂石工は国内最大規模の近世石工集団であり、その製品は全国各地に分布する。大坂石工に関しては文献史料から、代表的な石工の名前や居住地などの基本情報が得られている(奇多楼主人1934、飛田2003)。泉州や大坂の石工に関しては、天岸正男氏による河内・摂津・河内における近世石工銘資料の集成や仲芳人氏による奈良県内の和泉石工資料集成により多くの作品が知られるようになった(天岸1979・1986a・1986b、仲1990)。江戸石工に関しては、埼玉県内の事例をもとに、江戸近郊における江戸石工製品の流通を論じた研究(池尻2006・2008)があるが、全体像はまだ解明されていない。また、近年は備前尾道の石工に関する基礎的調査が進み、瀬戸内沿岸だけでなく18世紀末以降は西廻り航路によって、新潟県以南の日本海沿岸各地に尾道石工の作品が存在することが知られるようになった(尾道市教育委員会2014)。

一方、近世の地方石工に関しても各地で研究が進められている。なかでも大分県国東半島の石工に関する調査報告(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1983・1984)、新潟県佐渡島所在の石工在銘資料の集成(計良2002)、近江石工に関する研究(田中井2005・2006・2007a・2007b・2008・2009)、越中石工(神通川石工・常願寺川石工・富山町石工)に関する研究(尾田1996・1998、滝本1999、古川2011a・2011b・2011c・2012a・2012b・2012c・2013・2014、富山市教育委員会埋蔵文化財センター2012・2013・2014・2015・2016a・2016b)、石工在銘資料から川崎市内居住石工の系譜を論じた研究(伊藤1987)、埼玉県内の事例に基づき地元石工と江戸石工の作品が混在する江戸近郊の近世石造物を取り上げた研究(齊藤1978、池尻2006)、仙台領内の石工とその出自を論じた研究(渡辺1987)、鳥根県内の近世石造物に刻まれた石工銘を網羅した研究(永井・齋藤2014)など

が注目される。

他に特定の石工に焦点を当てたものとしては、高遠の名石仏師として知られる守屋貞治（曾根原1969、小松1978）や、江戸後期の石碑彫刻の名工として知られる江戸字彫り石工の窪世祥（嘉津山2016）をはじめ、幕末期に大和・大坂で活躍した名人石工丹波佐吉（金森1983、磯部2007・2008）、諏訪石工山田平蔵（曾根原1980）、越後柏崎石工の小林源之助・久助群鳳父子（金森1985）、江戸中期の大和国佐保の庄の石工儀助（仲1987）など多くの研究がある。

遠隔地の石工の作品については、製品が長距離運ばれたのか、石工が出張製作したのか判別する必要があるが、その際に決め手となるのが石材である。石工と石材との関係性を追求することの必要性は指摘され続けてきたものの（大護1978・1987、小松2001）、石造物調査を行う人文系研究者と、石材に明るい地質・鉱物学者との連携は十分に行われてこなかった。

近世石造物に記された石工銘は、紀年銘とともに近世石造物の歴史的価値を示す極めて重要な属性であり、石材と組み合わせることで石造物の流通を解明することが可能となる。筆者は平成26年度から科学研究費基盤研究A「石造物研究に基づく新たな中近世史の構築」に取り組んでおり、調査地として選んだ日本海沿岸の湊町で、瀬戸内沿岸から運ばれた花崗岩を用いた大坂・備後尾道・長州赤間関などの石工の作品を多数確認したことから、泉州石工や大坂石工のデータベースの構築を進めている。さらに、帯磁率の違いにより西日本の花崗岩の産地同定に取り組んでいる先山徹氏と共同で、石工銘のある製品に関し帯磁率を測定し、石工と石材との関係性を検討している。

本稿では、近世石工の基礎的研究の手始めに、泉州石工・大坂石工の作品を多数確認した和歌山県高野町の高野山奥之院と大阪市住吉区の住吉大社にある石工銘を有する近世石造物を検討する。

2. 高野山奥之院の大名墓を作った石工

(1) 高野山奥之院における納骨と石塔造立

光仁7（816）年に弘法大師空海が入定した紀州高野山奥之院は、古代より現在に至るまで納骨信仰の霊場として知られ、全国各地からおびただしい数の納骨・納経が繰り返されてきた（元興寺文化財研究所1982）。奥之院では12世紀から中国産白磁四耳壺や渥美焼・常滑焼の壺などを用いた納骨が始まり（降矢2016）、13世紀第4四半期頃からは別石五輪塔、15世紀中葉からは一石五輪塔の造立が開始され、後者は15世紀第3四半期から16世紀前半に爆発的に盛行する（狭川2016）。文献史料によれば、高野山への納骨は、子院では11世紀から既に確認できるのに対して奥之院は12世紀とやや遅れ、中世をとおして貴族・僧侶・武家ともに身分の高いものは子院を建立し、そこに納骨し供養していたと考えられている（坂本2016）。16世紀末から17世紀初頭頃には高野山上の各子院は全国各地の大名・武士と宿坊・師檀関係を結び、納骨・供養の依頼を受け、全国の大名家が競いあうように大型の石塔を奥之院に造立するようになる。

奥之院にある30万基超とされる石造物は、ユネスコの世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産の一つでもある史跡高野山町石とともに、高野山の石造文化を特徴づけるものである。

なかでも奥之院に全国各地の大家によって営まれた大型の石塔類は、この地がいかに多くの人々の信仰を集めていたかを訪れる者に強く印象付ける。

高野山の石造物は古くから注目されており、慶長以前の紀年銘資料に関しては約2000点もの集成がなされ、その概要が明らかになっているが、膨大な近世の石造物に関しては、まとまった調査報告は公表されていない(巽・愛甲編1974、巽・愛甲・小賀編1995、高野町史編纂委員会2012)。

(2) 高野山奥之院の近世大名墓と石工

奥之院では慶長期に始まる近世大家による大型石塔の造営に先行するものとして、伊予国河野道直の天正15(1587)年銘の五輪塔(総高160cm超)、その母の天正16年銘の五輪塔(総高160cm超)や天正18(1590)年3月18日造立の石田三成逆修五輪塔が知られる(木下2014)。慶長12(1607)年に徳川家康の次男結城秀康のために建てられた国内最大の石廟(重要文化財)や、寛永4(1627)年に二代将軍徳川秀忠の三男駿河大納言忠長が生母江のために建てた奥之院最大の五輪塔(和歌山県指定文化財)が示す通り、慶長から寛永期にかけ、奥之院は徳川将軍家を頂点とする近世大家の分霊地として確立する。江戸後期の文化年間には全国の259の大家のうち4割強の110家が高野山に石塔を造立していたとされる(日野西1990)。

奥之院にある近世大名墓は、これまでに一般書(金野1984、日野西1990、木下2014)のなかで一部が紹介されたことはあるが、網羅的な研究は公表されていない¹⁾。高野山大学図書館・同密教文化研究所の木下浩良氏は奥之院にある124の大名の石塔を紹介しており、その中に石工銘を持つ石塔が13基含まれている(木下2014)。また古くは、石造物研究家として知られた天岸正男氏が奥之院で石工銘を有する石塔62基を確認し、報告している(天岸1972)。

天岸氏と木下氏により報告された石工銘を有する大名墓は、総高3メートルを超す大型の五輪塔がほとんどであることから、それらの調査に並行して、3メートルを超す大型五輪塔に関して石工銘の有無を確認した結果、新たに石工銘を有する近世大名墓を2基発見することができた²⁾。本稿で検討する奥之院にある石工銘を有する大名墓は53基である(図1・表1～3)。53基の内訳は、五輪塔が41基と最も多く、石門が8基とこれ次ぎ、他に石鳥居2基(8・10)、櫛型墓標1基(42)、球形墓標1基(53)である。このうち、石門と石鳥居は仙台藩主伊達家の墓所に限られる。伊達家墓所では、歴代藩主の墓標に五輪塔が用いられているものの、五輪塔そのものに石工銘があるのは初代藩主伊達政宗墓(9)のみで、2代藩主忠宗墓(10)と3代藩主綱宗墓(8)は石鳥居に石工銘を記し、4代藩主以降は石門に石工銘を刻むようになる(3～7、11～13)。石工銘を有する53基の石造物に記された石工は総数66名で、内訳は大坂石工46名(表4)、泉州石工15名(表5)、江戸石工5名(表6)である。53基のうち、前述の仙台藩2代藩主伊達忠宗墓(10)と3代藩主綱宗墓の石鳥居(8)は、泉州・大坂・江戸石工の合作である。

石材は、伊豆石が使われた仙台藩4代藩主伊達綱村墓の石門(13)と、同じく5代藩主伊達吉村の石門(12)、産地不明の安山岩を使った二本松藩2代藩主丹羽長次の櫛形墓標(42)を除き、他は全て花崗岩である。5代藩主伊達吉村の石門(12)を伊豆石で製作した江戸石工の古藤正助は、そ

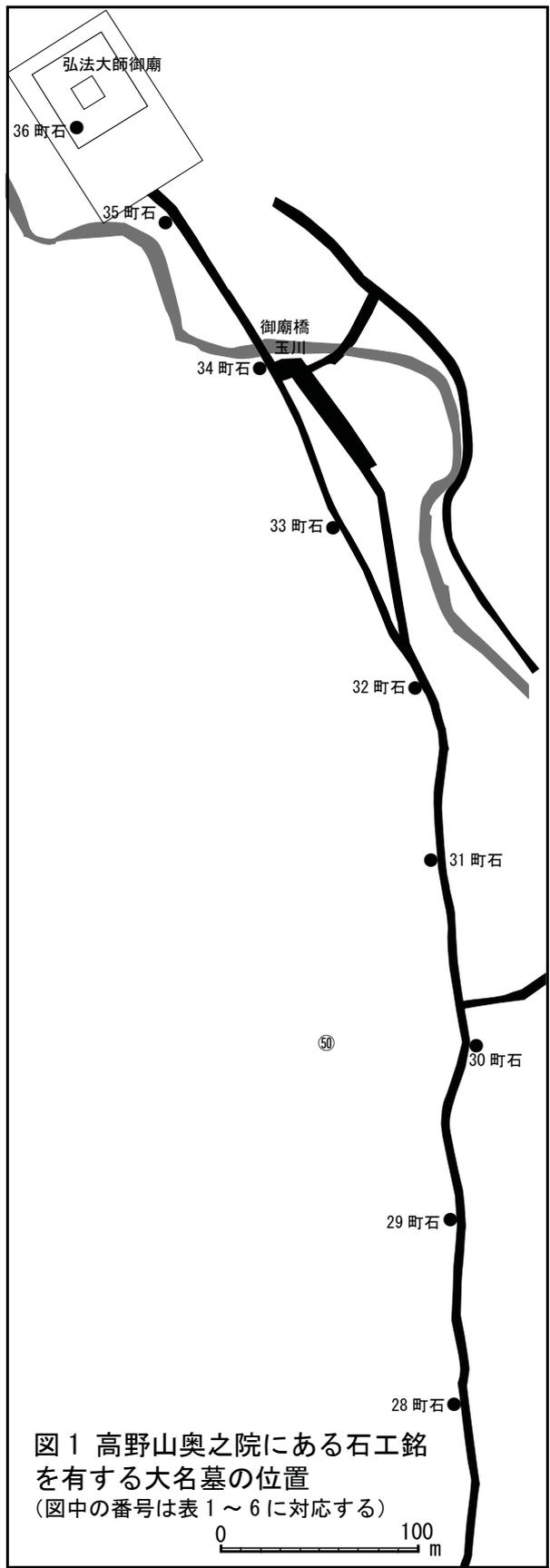
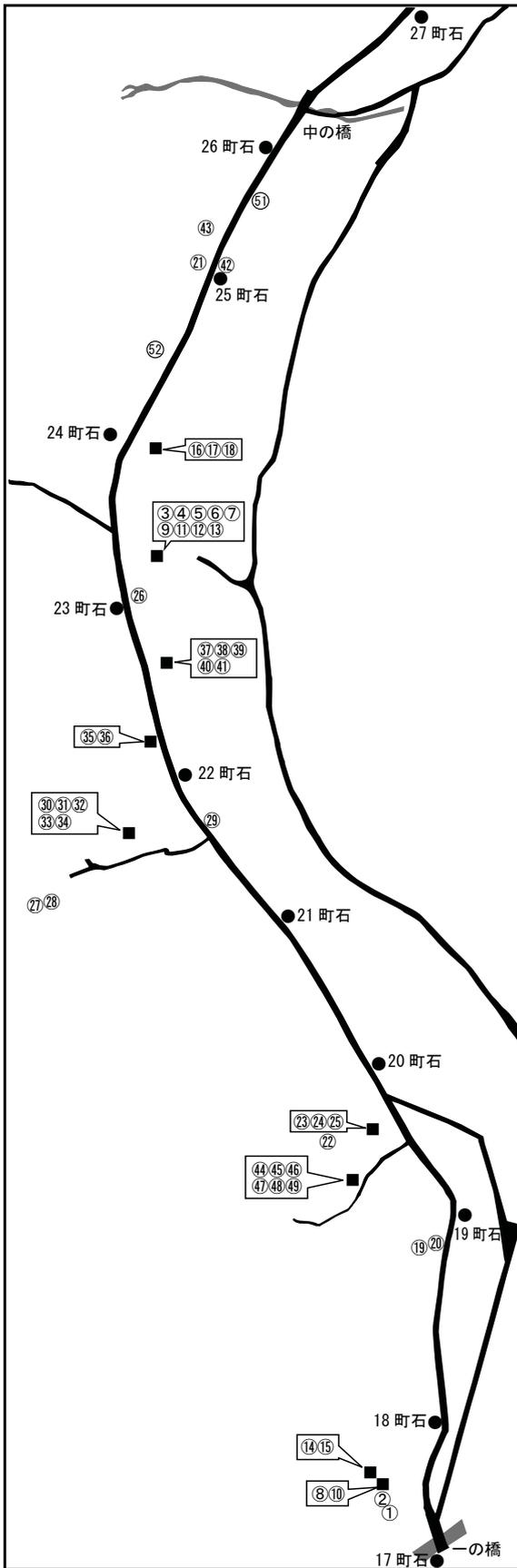


図1 高野山奥之院にある石工銘を有する大名墓の位置
(図中の番号は表1~6に対応する)

0 100 m

表1 高野山奥之院の石工銘をもつ大名墓(1)

No	石工	高 cm	年代		作品	施主	宿坊	筆者
			没年	造立年				
1	石大工 大坂 左内	470	1642.1125		柳川藩初代藩主立花宗茂 五輪塔	立花忠茂 (嗣子)	清浄心院 新御坊宣維	
2	石作者 泉州 久蔵	430	1617.0306		山形藩 2代藩主最上家親 五輪塔	最上家信 (孝子)	往生院 観音院盛典	大聖院
	石作者 泉州 弥左衛門							
3	石工 大坂 明石屋弥兵衛	193	1812.0603	1813.0624	仙台藩 9代藩主伊達周宗 石門			
4	石工 大坂 伊豫屋市兵衛	180	1819.0715	1820.0524	仙台藩 10代藩主伊達斉宗 石門			
5	石工 大坂 名田屋太郎兵衛	195	1796.0527	1797.0527	仙台藩 7代藩主伊達重村 石門			
6	石工 大坂 樋口屋加右衛門	190	1828.0113	1828.1008	仙台藩 11代藩主伊達斉義 石門			
7	石工 樋口屋利助	175	1842.0424	1841.0724	仙台藩 12代藩主伊達斉邦 石門			
8	石工 泉州 正木惣兵衛	375	1711.0719	1714.0804	仙台藩 3代藩主伊達綱宗 石鳥居	伊達吉村		
	石工 江戸 高田源太郎							
	石工 大坂 本庄屋吉兵衛							
9	此石塔大工 左内	510	1636.0627	1637.0524 (1周忌)	仙台藩初代藩主伊達政宗 五輪塔	伊達忠宗 (孝子)	観音院威典	
10	石工 和泉 小左衛門	380	1658.0712	1659.0712 (1周忌)	仙台藩 2代藩主伊達忠宗 石鳥居	伊達綱宗 (嗣君)		
	石工 和泉 市十郎							
	石工 大坂 庄兵衛							
	石工 江戸 半三郎							
11	石工 江戸 古藤正助	185	1756.0621	1756.1024	仙台藩 6代藩主伊達宗村 石門			
12	石工 江戸 古藤正助	193	1752.0208	1752.1024	仙台藩 5代藩主伊達吉村 石門			
13	石工 江戸 海野庄太夫	207	1720.0620	1719.0805	仙台藩 4代藩主伊達綱村 石門			
14	大坂 石作 与七郎	430	1658.0608	1659.0608 (1周忌)	宇和島藩初代藩主伊達秀宗 五輪塔	伊達宗利 (孝子)	観音院	
	大坂 石作 助衛門							
15	石作者 右衛門	351	1630.0807		宇和島藩初代藩主伊達秀宗室 五輪塔		観音院盛典	
16	石工 大坂之住 野田屋半兵衛	430	1673.0219		薩摩藩 2代藩主島津光久長男 島津綱久 五輪塔	島津綱貴	蓮金院秀傳	
17	大坂 松屋与兵衛	530	1694.1129		薩摩藩 2代藩主島津光久 五輪塔	島津綱貴	谷上蓮金院哲眞	
18	石大工 大坂 寺内左内	530	1638.0223		薩摩藩初代藩主島津家久 五輪塔	島津光久	谷上蓮金院秀禪	
19	大坂 石屋甚兵衛	360	1669.0901		津山藩 2代藩主森長継女於鍋 (松平主馬康矩室) 五輪塔	森長継 (慈父)	釈迦文院堯智	
20	石屋彦作	460	1624.0707	1624.1107	津山藩初代藩主森忠政 五輪塔	森長継	釈迦文院朝遍	瑞泉院 秀衛
21	大坂 石屋 寺内左内	400	1642.1122	1643.0930	久留米藩初代藩主有馬豊氏 五輪塔	有馬忠郷 (孝子)	千年院谷中禅院	
22	大坂 石工 寺内左内	350	1648.0202		旗本寄合久貝正俊 五輪塔	久貝正長 (孝子)	曼荼羅堂恢處	
23	石工 大坂住 北野屋長右衛門	420	1699.0618	1699.0910	久保田藩 3代藩主佐竹義處長男 佐竹義苗 五輪塔	佐竹千代丸 (孝弟)	清浄院宥恵	微雲院

施工者			文献	備考	石材
奉行・主立・幹事	小奉行・副司・下奉行	役人・下司・小吏			
柘植甚右衛門宣福 甲斐市丞能合			天岸1972 木下2014		花崗岩
田中土佐守元盛 佐武喜八郎光次			天岸1972 木下2014		花崗岩
大立目彌寛藤原近直	佐藤義之介藤原信峯	木村武左衛門平時雄	天岸1972		花崗岩
赤坂孫右衛門平景明	佐藤半左衛門藤原長元	引地九右衛門平氏實	天岸1972		
加藤文右衛門藤原安清	平井大吉源清信	須田文右衛門藤原直孝	天岸1972		花崗岩
櫻田権太夫藤原景行	八乙女戈輔藤原盛廣	粟野三右衛門藤原良知	天岸1972		
及川晋三郎源安喬	平井大之進源直温	宮澤義藏藤原實用 清水彌三郎源原	天岸1972		花崗岩
津田民部藤原武康	橋本正八郎藤原重賢	松本莊次郎藤原重伸	天岸1972		花崗岩
田中金右衛門尉			天岸1972		花崗岩
奥山大学助常	新田弥一右衛門尉親重	横田八左衛門尉吉継	天岸1972		花崗岩
布施卯正次藤原定時	石森長太夫藤原元宣	渡辺六三郎源恒 黒瀬源兵衛源實秀	天岸1972		花崗岩
後藤多宮藤原信康	秋保甚助平主盛	渡辺六三郎源恒 萱場清左衛門平利信	天岸1972		伊豆石
但木主悦源重秋	鎌田源左衛門源重信 粟野作右衛門藤原重禮	秋保甚助平主盛	天岸1972		伊豆石
蔭山三郎兵衛			天岸1972 木下2014		花崗岩
横山惣左衛門盛次			天岸1972		花崗岩
甲斐勝右衛門尉重利			天岸1972		花崗岩
清水弥兵衛尉表康			天岸1972		花崗岩
是枝喜右衛門尉快温			天岸1972		花崗岩
福地弥左衛門重時 山内傳右衛門道能			天岸1972		花崗岩
松本主馬 野田加右衛門 辰田与兵衛			天岸1972		花崗岩
各務源左衛門 結城藤右衛門			木下2014		花崗岩
深川安右衛門			木下2014		花崗岩
細井兵右衛門高賢 福田平右衛門家益	日野市兵衛道久 堀尾勝左衛門次長	辻所左衛門安助 若木太郎兵衛重長	天岸1972		花崗岩

表2 高野山奥之院の石工銘をもつ大名墓(2)

No	石工	高 cm	年代		作品	施主	宿坊	筆者
			没年	造立年				
24	石工 大坂住 榎並屋伊兵衛正 次	430	1671.1205	1672.1222	久保田藩2代藩主佐竹義隆 五輪塔	佐竹義處 (孝子)	清浄心院宣恵	
	石工 大坂住 黒田甚兵衛							
25	石屋 大坂住 長右衛門	430	1703.0623	1703.1104	久保田藩3代藩主佐竹義處 五輪塔	佐竹義格 (孝子)	清浄院宥恵	靈山院
26	石作 谷川村 太□	455	1621.1224	1622.1112	尾州小川藩水野重仲五輪塔 (紀州(初代)南龍院目付役)	水野重忠 (孝子)	寶行院之 []	
	石作 谷川村 五□							
27	石大工 大坂 十兵衛尉	212	1618.0603	1630.0318	佐賀藩初代藩主鍋島勝茂父 鍋島直茂 五輪塔	鍋島勝茂 (孝子)	本願院	
28	石大工 大坂 十兵衛尉	212	1629.0108	1630.0318	佐賀藩鍋島直茂室 五輪塔	鍋島勝茂 (孝子)	本願院	
29	石屋 大坂之 太郎左衛門	500	1625.0527		加納藩奥平信昌室亀姫 五輪塔	松平清匡 (忠明)	五室道花院 中性院良雄	金塚長 蔵
30	石大工 大坂 太郎左衛門	390	1624.1023	1625.1023 (1周忌)	盛岡藩初代藩主南部利直二男 南部政直 五輪塔	南部重直		
31	石屋 大坂 甚左衛門	410	1632.0818	1633.0818 (1周忌)	盛岡藩初代藩主南部利直 五輪塔	南部重直 (孝子)	遍照光院阿闍梨 良恵	
32	石屋 大坂 庄兵衛	400	1662.1026	1664.1026 (3回忌)	盛岡藩2代藩主南部重直 五輪塔	南部重信	遍照光院頼任	
33	石屋 大坂 庄兵衛	405	1662.0912	1663.0912 (1周忌)	盛岡藩初代藩主南部利直室 五輪塔	南部重直	遍照光院頼任	
34	石作者 鳥取 石工門	380	1631.11.21	1632.0721	盛岡藩初代藩主南部利直四男 南部利康 五輪塔	南部重信	遍照光院良恵	
	石作者 鳥取 九兵衛							
35	大坂 石屋 権左衛門	470	1644.0325		姫路藩松平忠明 五輪塔	松平靄松 (孝子)	西光院谷中性院	
36	大坂 石屋 甚右衛門	320	1660.0227		最上藩松平清良母五輪塔 (姫路藩松平忠明側室三好氏)			
37	石工 湯川半兵衛	440	1679.0920		岩国藩3代藩主吉川廣嘉 五輪塔	吉川廣紀	金光院	
38	石工 大坂住 和泉屋長平衛	390	1764.1106		岩国藩6代藩主吉川経永 五輪塔	吉川経倫	金光院	
39	石工 大坂住 平野屋長右衛門	300	1776.0518		岩国藩7代藩主吉川経倫室 五輪塔		金光院	
40	石工 堺 和泉屋六兵衛	440	1715.0619		岩国藩5代藩主吉川廣達 五輪塔		金光院	
	石工 堺 和泉屋林兵衛							
41	庄兵衛	440	1666.0505		岩国藩吉川廣正(倉部員外郎) 五輪塔	吉川廣嘉	金光院	
42	石工 大坂住 小嶋半兵衛	360	1698.0626		二本松藩2代藩主丹羽長次 櫛形墓標	丹羽長之 (孝子)	三寶院	
43	石作 泉州黒田村 甚助	450	1618.0410	1619.0315 (1周忌)	越後高田藩酒井家次 五輪塔	酒井忠勝 (孝子)	三之室 大徳院昌阿上人	
44	石匠 尼崎屋次右衛門 尉	435	1625.0427	1657.0927 (33回忌)	長州藩初代藩主毛利輝元 五輪塔	毛利綱廣	安養院宥昌	南蔵院 榮巖
45	石工 大坂 尼崎屋治右衛門	425	1721.0419	1721.0725	長門長府藩4代藩主毛利宗元 五輪塔		安養院連龍	龍城院 應範
46	石工 大坂 尼崎屋治右衛門	430	1739.0822	1739.1100	長州藩4代藩主毛利吉廣室 五輪塔	毛利宗廣	安養院賢澄	威光院 唯乗

施工者			文献	備考	石材
奉行・主立・幹事	小奉行・副司・下奉行	役人・下司・小吏			
小笠原氏根田治郎俊興	川尻源五左衛門通明 河野十左衛門通則	長山彦兵衛盛十 齋藤弥左衛門忠政	天岸1972		花崗岩
清水忠兵衛清房	岸奥右衛門延智 安藤茂兵衛季茂	田野縫尉之丞安宜	天岸1972	[使者根岸武左衛門秀久]	花崗岩
小幡助兵衛□通			天岸1972		花崗岩
佐々木石井 權大夫 源忠□	井原吉三郎		木下2014		花崗岩
佐々木石井 權大夫 源忠□	井原吉三郎		木下2014		花崗岩
横井仁衛門			天岸1972 木下2014	時代之代官大坂塩屋 宗五郎	花崗岩
			天岸1972		花崗岩
蛇日孫次郎 高橋宗左衛門			天岸1972 木下2014		花崗岩
野田金太夫 生方次郎兵衛			天岸1972		花崗岩
野田金太夫 生方次郎兵衛			天岸1972		花崗岩
苔米地刑部少輔 松澤孫四郎 工藤長助			木下2014		花崗岩
塩屋宗五郎(大坂代官)			天岸1972 木下2014		花崗岩
松平清良			天岸1972		花崗岩
			天岸1972		花崗岩
			天岸1972		花崗岩
			天岸1972		花崗岩
			天岸1972		花崗岩
河福助八郎源政明(監)			天岸1972 天岸1979	享年56 埋葬地芝泉 岳禅寺	棹石安山岩 台石花崗岩
			木下2014		花崗岩
新山五郎左衛門尉源就眞	野尻權右衛門尉吉明		天岸1972		花崗岩
榎崎吉右衛門景治		豊嶋半右衛門定信	天岸1972	享年19 死亡地江戸	花崗岩
榎崎久右衛門豊征		中村左兵衛清良 榎崎源右衛門清辰	天岸1972	文化7年6月13日に 大坂藩邸の奉行により 毛利吉廣と合葬	花崗岩

表3 高野山奥之院の石工銘をもつ大名墓(3)

No	石工	高 cm	年代		作品	施主	宿坊	筆者
			没年	造立年				
47	石工 大坂伏見堀 和泉屋仁右衛門	430	1740.0307	1740.0600	長州藩 6代藩主毛利宗廣室 五輪塔	毛利宗廣	安養院賢澄	威光院 唯乘
	石工 大坂 尼崎屋治右衛門		1751.0204		長州藩 6代藩主毛利宗廣 五輪塔			
48	石工 大坂 尼崎屋友次郎	430	1721.0913	1761.0927	長州藩 5代藩主毛利吉元 五輪塔		安養院連龍	梅本院 政眞
	石工 大坂 和泉屋長兵衛	430	1760.0308		長州藩 5代藩主毛利吉元室 五輪塔			
49	石工 大坂 和泉屋長兵衛	430	1760.0619	1760.1107	長州藩 8代藩主毛利重就養嗣子 毛利重廣 五輪塔		安養院唯乘	威光院 本瑞
50	石作 泉州黒田村 甚左衛門	660	1626.0915	1627.0915 (1周忌)	2代将軍徳川秀忠室江 五輪塔	徳川忠長	大徳院住持宥雅	大聖院 長盛
51	作者 泉州 久蔵	500	1615.0411	1617.0314	加納藩初代藩主奥平信昌 五輪塔	松平清匡 (忠明) (孝子)	五之室蓮華院内 中性院良雄 同良信	大聖院 長盛
	作者 泉州 甚助							
52	大工 左内	360	1657.0929		高崎藩 2代藩主安藤重長 五輪塔	安藤重貞	大徳院	
53	石屋 寺内左内	不明	1639.0729	1643.0000	村上藩堀直寄 球形塔	未確認のため不明		

れから僅か4年後に手掛けた6代藩主伊達宗村の石門(11)には花崗岩を用いており、必ずしも江戸石工だからといって伊豆石が使われているわけではない。

石工銘を有する53基について、10年単位で、製作に関わった石工の時間的推移を検討した(図2)。1610年代の3基は全て泉州石工の作品であったが、1620年代には大坂石工の作品が現れ、数的に早くも泉州石工を上回る。続く1630年代までは大坂石工と泉州石工の作品が併存するが、1640~1700年代には大坂石工の独占状態で、この間、泉州石工が手掛けたのは、大坂石工・江戸石工との合作である仙台藩2代藩主伊達忠宗墓の石鳥居(10)のみである。1710年代には再び泉州石工の作品がみられるが、1720年代以降には続かない。江戸石工単独の作品は1720年代に1基(13)、1750年代に2基(11・12)みられるが、それらはいずれも仙台藩主伊達家墓所の石門である。

以上、石工から見た場合、奥之院の近世大名墓は、泉州石工による出現期(1610年代)、泉州石工と大坂石工の併存期(1620-30年代)、大坂石工の第一次独占期(1640-1700年代)、泉州・大坂・江戸の併存期(1710-50年代)、大坂石工の第二次独占期(1770年代以降)に区分されよう。

次に大坂石工・泉州石工・江戸石工について、個別に検討する。

【大坂石工】(表4)

大坂石工は46件で、同一人物の重複を除くと28名となる。このうち複数の作品を手掛けた石工は9名である。それらを古い順に並べると、太郎左衛門(1625年に2基)→十兵衛尉(1630年に2基)→寺内左内(1637・38・42・43・48・57年に各1基)→庄兵衛(1659・63・64・66年に各1基)→黒田甚兵衛(1666・72年に各1基)→野田屋半兵衛(1673・79・98年に各1基)→北野屋長右衛門(1699・1703年に

施工者			文献	備考	石材
奉行・主立・幹事	小奉行・副司・下奉行	役人・下司・小吏			
榑崎久右衛門豊征		吉田新右衛門政信 榑崎源右衛門清辰	天岸1972	天保8年7月21日に 大坂藩邸の奉行によ り合葬	花崗岩
生田八郎右衛門惟貞		尾崎平兵衛乗平 臼井甚左衛門常督			
井上源三郎盛口		和田權右衛門重信	天岸1972	天保8年6月13日に 大坂藩邸の奉行によ り合葬	花崗岩
榑木伊右衛門忠眞		高井弥兵衛眞之 村上十兵衛信堯			
榑木伊右衛門忠眞		村上十兵衛信堯	天岸1972		花崗岩
天野傳右衛門尉藤原清宗 河合助之進藤原重俊	池谷源左衛門尉 赤澤治太夫 山田勘太郎 高原六左衛門尉 加藤七郎兵衛尉		天岸1972 木下2014	泉州黒田村石作 寛永9年(1632) 増上寺徳川秀忠廟床 下石「石屋甚左衛門 尉重正」銘	花崗岩
中村又右衛門尉				関根20160310 石工銘確認	花崗岩
南文左衛門				関根20160310 石工銘確認	花崗岩
未確認のため不明			天岸1972	未確認	不明

各1基)→尼崎屋治右衛門(1721・29・40年に各1基)→和泉屋長平衛(1760・61・64年に各1基)となり、同じ石工の作品が連続して認められる一方、石工どうしは年代的にほとんど重複していないことが分かった。最も多くの作品が確認された寺内左内の場合、注文主は仙台藩伊達家・薩摩藩島津家・柳川藩立花家・久留米藩有馬家・飯田藩松平家・旗本寄合久貝家・高崎藩安藤家とバラエティーに富む。岩国藩吉川家のように歴代の五輪塔を特定の石工に注文している場合もあるが、仙台藩伊達家・薩摩藩島津家・盛岡藩南部家など、毎回のように石工を変えているケースのほうが目立つ。また、大名家はそれぞれ特定の宿坊と結びついているが、石工と宿坊との間に関連性は見られない。以上のことから、高野山奥之院における近世大名家の石塔造立は、その時々で手掛ける石工が決まっており、大名家の選択の余地は限られていたと考えられる。

なお複数の大坂石工による合作が4例ある。1例目は万治2(1659)年銘の宇和島藩初代藩主伊達秀宗の五輪塔(14)で、与七郎と助衛門の2名の名前が認められた。2例目は寛文12(1672)年銘の羽州久保田藩2代藩佐竹義隆の五輪塔(24)で、榑並屋伊兵衛正次と黒田甚兵衛によって製作された。3例目は元文5(1740)年銘の長州藩6代藩主毛利宗廣夫妻の五輪塔(47)で、尼崎屋治右衛門と和泉屋仁右衛門の合作である。4例目は宝暦11(1761)年銘の長州藩5代藩主毛利吉元夫妻の五輪塔(48)で、尼崎屋友次郎と和泉屋長兵衛によって作られた。

次に高野山奥之院の大名墓を手がけた大坂石工のうち、奥之院以外で作品が確認されている石工について述べる。

管見によれば、元禄11(1698年)銘の奥州二本松藩2代藩主丹羽長次の櫛型墓標(42)は、大阪府

表4 高野山奥之院の大名墓を作った大坂石工(年代順)

石造物 No	職名等	石工				年代	作品	被供養者	石材
		苗字	屋号	名	居住地				
20			石屋	彦作		1624	五輪塔	津山藩初代藩主森忠政	花崗岩
29	石屋			太郎左衛門		1625	五輪塔	加納藩奥平信昌室龜姫	花崗岩
30	石屋			太郎左衛門		1625	五輪塔	盛岡藩初代藩主南部利直二男南部政直	花崗岩
27	石大工			十兵衛尉		1630	五輪塔	佐賀藩初代藩主鍋島松鍋島直茂	花崗岩
28	石大工			十兵衛尉		1630	五輪塔	佐賀藩初代藩主鍋島勝茂父鍋島直茂	花崗岩
31	石屋			甚左衛門		1633	五輪塔	盛岡藩初代藩主南部利直	花崗岩
9	此石塔大工			左内		1637	五輪塔	仙台藩初代藩主伊達政宗	花崗岩
18	石大工	寺内		左内		1638	五輪塔	薩摩藩初代藩主島津家久	花崗岩
1	石大工	(寺内)		左内		1642	五輪塔	柳川藩初代藩主立花宗茂	花崗岩
21	石屋	寺内		左内		1643	五輪塔	久留米藩初代藩主有馬豊氏	花崗岩
53	石屋	寺内		左内		1643	球形塔	飯田藩堀直寄	不明
35	石屋			権左衛門		1644	五輪塔	姫路藩松平忠明	花崗岩
22	石工	寺内		左内		1648	五輪塔	旗本寄合久員正俊	花崗岩
44	石匠		尼崎屋	次右衛門尉		1657	五輪塔	長州藩初代藩主毛利輝元	花崗岩
52				左内		1657	五輪塔	高崎藩2代藩主安藤重長	花崗岩
10	石工			庄兵衛		1659	鳥居	仙台藩2代藩主伊達忠宗	花崗岩
14	石作			与七郎		1659	五輪塔	宇和島藩初代藩主伊達秀宗	花崗岩
14	石作			助衛門					
36	石屋			甚右衛門		1660	五輪塔	山形藩松平清良(忠弘)母 (姫路藩松平忠明側室三好氏)	花崗岩
33	石屋			庄兵衛		1663	五輪塔	盛岡藩初代藩主南部利直室	花崗岩
32	石屋			庄兵衛		1664	五輪塔	盛岡藩2代藩主南部重直	花崗岩
19		黒田?	石屋	甚兵衛		1666	五輪塔	津山藩2代藩主森長継女於鍋(松平主馬康矩室)	花崗岩
41			(本庄屋)	庄兵衛		1666	五輪塔	岩国藩吉川廣正	花崗岩
24	石工		榎並屋	伊兵衛正次		1672	五輪塔	久保田藩2代藩主佐竹義隆	花崗岩
24	石工	黒田		甚兵衛					
16	石工	湯川?	野田屋	半兵衛		1673	五輪塔	薩摩藩2代藩主島津光久長男島津綱久	花崗岩
37	石工	湯川	野田屋?	半兵衛		1679	五輪塔	岩国藩3代藩主吉川廣嘉	花崗岩
17			松屋	与兵衛		1694	五輪塔	薩摩藩2代藩主島津光久	花崗岩
42	石工		小嶋(屋)	半兵衛		1698	櫛形墓標	二本松藩2代藩主丹羽長次	花崗岩
23	石工		北野屋	長右衛門		1699	五輪塔	久保田藩3代藩主佐竹義處長男佐竹義苗	花崗岩
25	石工			長右衛門		1703	五輪塔	久保田藩3代藩主佐竹義處	花崗岩
8	石工		本庄屋	吉兵衛		1714	鳥居	仙台藩3代藩主伊達綱宗	花崗岩
45	石工		尼崎屋	治右衛門		1721	五輪塔	長門長府藩4代藩主毛利宗元	花崗岩
46	石工		尼崎屋	治右衛門		1739	五輪塔	長州藩4代藩主毛利吉廣室	花崗岩
47	石工		尼崎屋	治右衛門		1740	五輪塔	長州藩6代藩主毛利宗廣室	花崗岩
47	石工		和泉屋	仁右衛門	伏見堀				
49	石工		和泉屋	長平衛		1760	五輪塔	長州藩8代藩主毛利重就養嗣子毛利重廣	花崗岩
48	石工		尼崎屋	友次郎		1761	五輪塔	長州藩5代藩主毛利吉元	花崗岩
48	石工		和泉屋	長平衛					
38	石工		和泉屋	長平衛		1764	五輪塔	岩国藩6代藩主吉川経水	花崗岩
39	石工		平野屋	長右衛門		1776	五輪塔	岩国藩7代藩主吉川経倫室	花崗岩
5	石工		名田屋	太郎兵衛		1797	石門	仙台藩7代藩主伊達重村	花崗岩
3	石工		明石屋	弥兵衛		1813	石門	仙台藩9代藩主伊達周宗	花崗岩
4	石工		伊豫屋	市兵衛		1820	石門	仙台藩10代藩主伊達齊宗	花崗岩
6	石工		樋口屋	加右衛門	(権右衛門町)	1828	石門	仙台藩11代藩主伊達齊義	花崗岩
7	石工		樋口屋	利助		1842	石門	仙台藩12代藩主伊達齊邦	花崗岩

茨木市目垣1丁目の佛照寺にある水盤(天岸1979)とともに、西横堀新渡辺橋西詰を本拠とする小嶋屋半兵衛の最古の作品である。小嶋屋半兵衛は、その後、奈良県橿原市小網の入鹿神社にある安政4(1858)年銘の狛犬(仲1999)まで、160年間で42作品を確認しており、歴代にわたり同じ名前を襲名していたと考えられる。小嶋屋半兵衛の作品は、大阪府と奈良県内に集中するが、香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮にも石灯笼2基(日本観光文化研究所編1984のW-57とW-181)がある。後述するように住吉大社でも小嶋屋半兵衛が手掛けた石灯笼を6基確認した。

尼崎屋治右衛門とともに元文5(1740)年銘の長州藩6代藩主毛利宗廣夫妻の五輪塔(47)を手掛けた和泉屋仁右衛門は、伏見堀一丁目を本拠とする。彼の作品は、香川県仲多度郡琴平町の金刀比

羅宮遙拜所にある享保14(1729)年銘の石灯籠(日本観光文化研究所編1984のW-223石灯籠)を最古に、後述する住吉大社の安永4(1775)年銘の石灯籠(表8-17)まで5例を確認している。このうち最も遠隔地のものは、大分県杵築市宮司の若宮八幡宮にある安永2(1773)年銘の石灯籠(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1984)である。また、後述する住吉大社石灯籠(表8-12)は、延享5(1748)年に岡田屋治兵衛により製作され、寛政4(1792)年に大坂長堀十町の名田屋太郎兵衛と長堀心斎橋石濱の岡田屋治兵衛によって再建された後、嘉永8(1856)年に再び和泉屋仁右衛門によって再修理されている。再建に携わった名田屋太郎兵衛は、寛政9(1797)年銘の仙台藩7代藩主伊達重村墓の石門(5)も手掛けている。

文政3(1820)年銘の仙台藩10代藩主伊達齊宗墓の石門(4)を手掛けた伊豫屋市兵衛は、大坂西横堀を拠点に、それから4年後の文政7年には住吉大社の石灯籠(表9-36)の製作にも従事している。

以上のように、高野山奥之院で大名墓の石塔類製作に関わった石工は、1690年代以降は奥之院の大名墓以外の作品も手掛け、それらに銘を記すようになったことが分かる。

職名は「石大工」が1640年代以前、「石屋」は1660年代以前に限られる。1640年代には「石工」が初めて使われ、1650-60年代には、「石匠」・「石工」・「石作」・「石屋」と様々な名称が使われるが、1670年代以降は「石工」に統一される。

【泉州石工】(表5)

泉州石工は14件で、同一人物の重複を除くと12名となる。このうち複数の作品を手掛けた石工は、久蔵(1617年に2基)と甚助(1617・19年に各1基)の2名である。また、複数の泉州石工による合作例は5例あり、その比率は大坂石工に比べ高い。

次に高野山奥之院の大名墓を手がけた泉州石工のうち、奥之院以外で作品が確認されている3名の石工について述べる。

寛永4(1627)年銘の2代将軍徳川秀忠の正室江の五輪塔(50)を製作した泉州黒田村の甚左衛門は、寛永9年に江戸の増上寺にある徳川秀忠廟の床下石に銘を残した石屋甚左衛門尉重正と同一人物と見られる(天岸1972)。また、寛文9(1669)年銘の大阪四天王寺石鳥居に修理工工として名前を残す甚左衛門宗茂(天岸1972)は、甚左衛門尉重正の後継者であろう。

江戸石工の高田源太郎・大坂石工の本庄屋吉兵衛とともに正徳4(1714)年銘の仙台藩3代藩主伊達綱宗墓の石鳥居(8)を手掛けた正木惣兵衛は、泉州日根之郡鳥取庄下出村を本拠とする。正木惣兵衛の作品としては、他に滋賀県甲賀市水口町嵯峨の八坂神社にある石橋(市指定文化財)が知られる(天岸1986b、田中井2008)。

同じ堺石工の和泉屋林兵衛とともに正徳5(1715)年銘の岩国藩5代藩主吉川廣達の五輪塔(40)を製作した和泉屋六兵衛は、寛延4(1751)年には大阪府泉南市信達市場の長慶寺にある宝篋印塔(天岸1986a)にも名前を残している。

泉州石工の職名は、1610-1630年代までは「石作者」ないし「石作」が主流で、1650年代以降「石工」に変わる。

表5 高野山奥之院の大名墓を作った泉州石工（年代順）

石造物No	職名等	石工				年代	作品	被供養者	石材
		苗字	屋号	名	居住地				
2	石作者			久蔵		1617	五輪塔	山形藩 2代藩主最上家親	花崗岩
2	石作者			弥左衛門					
51				久蔵		1617	五輪塔	加納藩初代藩主奥平信昌	花崗岩
51				甚助					
43	石作			甚助	泉州黒田村	1619	五輪塔	越後高田藩酒井家次	花崗岩
26	石作			太口	泉州谷川村	1622	五輪塔	尾州小川藩水野重仲	花崗岩
26	石作			五口	泉州谷川村				
50	石作者			甚左衛門	泉州黒田村	1627	五輪塔	2代将軍徳川秀忠室江	花崗岩
15	石作者			右衛門		1630	五輪塔	宇和島藩初代藩主伊達秀宗室	花崗岩
10	石工			小左衛門		1659	鳥居	仙台藩 2代藩主伊達忠宗	花崗岩
10	石工			市十郎					
8	石工	正木		惣兵衛		1714	鳥居	仙台藩 3代藩主伊達綱宗	花崗岩
40	石工		和泉屋	六兵衛	堺	1715	五輪塔	岩国藩 5代藩主吉川廣達	花崗岩
40	石工		和泉屋	林兵衛	堺				

表6 高野山奥之院の大名墓を作った江戸石工（年代順）

石造物No	職名等	石工		年代	作品	被供養者	石材
		苗字	名				
10	石工		半三郎	1659	鳥居	仙台藩 2代藩主伊達忠宗	花崗岩
8	石工	高田	源太郎	1714	鳥居	仙台藩 3代藩主伊達綱宗	花崗岩
13	石工	海野	庄太夫	1720	石門	仙台藩 4代藩主伊達綱村	伊豆石
12	石工	古藤	正助	1752	石門	仙台藩 5代藩主伊達吉村	伊豆石
11	石工	古藤	正助	1756	石門	仙台藩 6代藩主伊達宗村	花崗岩

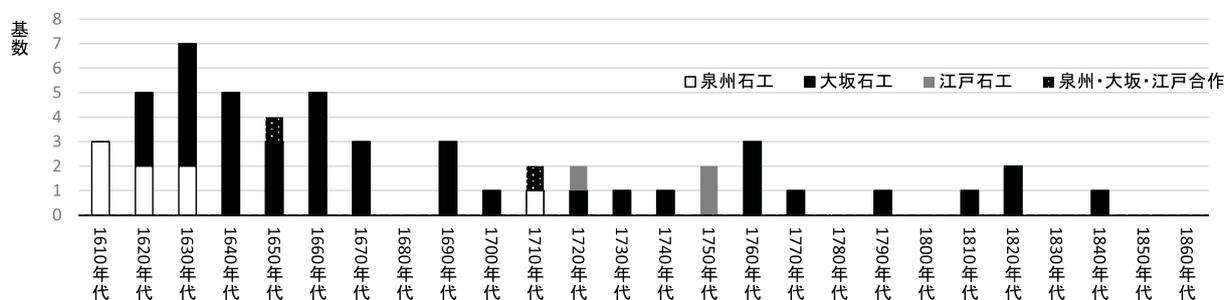


図2 高野山奥之院における石工の作品数の変遷

【江戸石工】（表6）

5作品で4名の江戸石工が確認された。全て仙台藩主伊達家に関わるもので、年代的には17世紀の中頃から18世紀中ごろの約100年間に限られる。そのなかで最も古い万治2（1659）年銘の2代藩主伊達忠宗墓の石鳥居（10）と2番目に古い正徳4（1714）年銘の3代藩主伊達綱宗墓の石鳥居（8）は、堺石工・大坂石工との合作であり、江戸石工単独のものとしては、高田源太郎が製作した享保5（1720）年銘の4代藩主伊達綱村墓の石門（13）が最も古い。宝暦2（1752）年銘の5代藩主伊達吉村墓の石門（12）と宝暦6年銘の6代藩主伊達宗村墓の石門（11）は、どちらも古藤正助によって製作された。

高野山奥之院の大名墓の製作に関わった4名の江戸石工のうち、万治2（1659）年銘の2代藩主伊達忠宗墓所の石鳥居（10）を手掛けた半三郎は、貞享4（1687）年に佐藤勘平衛とともに埼玉県春日部市小淵観音院の常夜塔（池尻2008）を製作した松屋町（現東京都中央区八丁堀）の半三郎と同一人物の可能性はある。

3. 住吉大社の石造物を作った石工

(1) 住吉大社への石灯籠の奉納

全国の運送船業者や漁業関係者から航海安全の信仰を集める住吉大社には、624基もの石灯籠が奉納されており、その数は約1800基とされる奈良市春日大社に次いで多く、京都府八幡市の石清水八幡宮の600基余に匹敵する。住吉大社の石灯籠は、春日大社や石清水八幡宮に比べ時代が下るが、巨大なものが多い上、奉納者も北は松前から南は薩摩にいたるまで全国各地に及ぶなどの特徴がみられる。なお、春日大社の石灯籠に関しては、平成8年から8年間にわたる悉皆調査で1826基中433基に石工銘が確認されており、南都の石工に次いで大坂の石工のものが多いことなどが明らかにされている（大西2002、石燈籠平成調査会2003）。石清水八幡宮では帝塚山大学により石灯籠の悉皆調査が行われ、江戸時代の石灯籠360基中24基に石工銘が確認されている（勝部編2010）。また、住吉大社と同じく全国から航海安全の信仰を集める香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮では610基もの石灯籠に関する悉皆調査が行われ、実測図を含めた詳細な調査報告書が刊行されている（日本観光文化研究所編1984）。

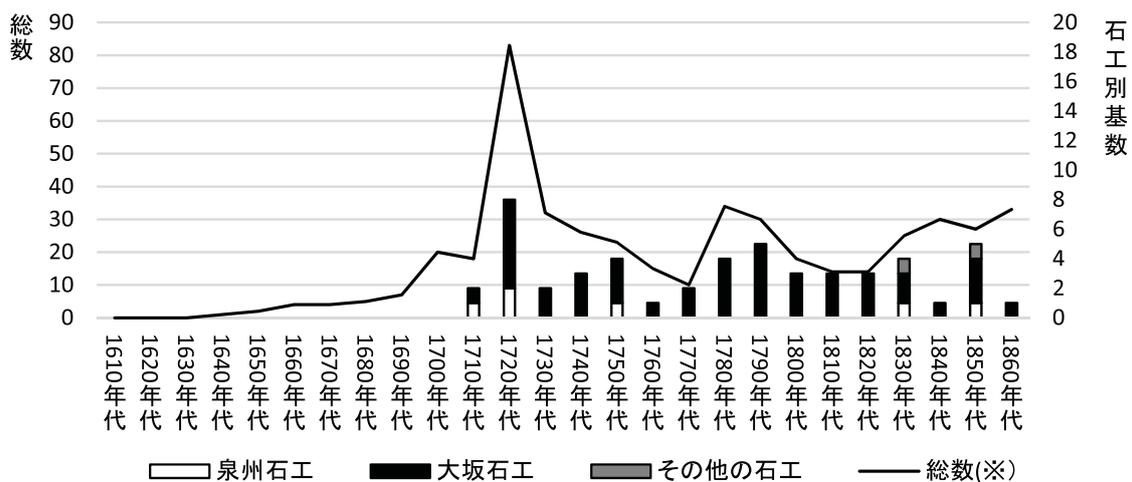
一方、住吉大社でも昭和7年3月に神社が境内の石灯籠610基を調査しており、『住吉神社石燈籠調書』なる報告書が存在するようだが一部の関係者の間で知られるに過ぎず公開はされていない。住吉大社の石造物に関してこれまで発表されたもの（大脇1931、梅原1931、佐々木1931a・1931b、入江1931、米田1983、所ほか1983、藤本1992）は少なくないが、一部の石造部を取り上げたり、特定の視点から検討したりしており、石工を論じるのに必要な情報を欠いている³⁾。

(2) 住吉大社の石造物に記された石工銘

筆者は平成27・28年度に3回にわたり住吉大社で石工銘を有する石造物の所在確認と調査を行った。その際に参考にしたのが、天岸氏の「大坂三郷の石工」（天岸1979）とウェブサイト「住吉Web博」の『住吉大社石燈籠図鑑』である⁴⁾。2015年9月2日の段階で『住吉大社石燈籠図鑑』には住吉大社の本殿より西側のエリアに所在する石灯籠254基に関して写真とともに刻まれている文字情報や石灯籠の形態的特徴などが掲載されている。『住吉大社石燈籠図鑑』に掲載された254基の石灯籠の中で石工銘が示されていたのは26基であった。筆者は、『住吉大社石燈籠図鑑』に掲載された石灯籠の銘文を現地で確認した際に、石工銘が見落とされていた石灯籠9基を見つけた。また、『住吉大社石燈籠図鑑』に載っていない本殿より西側のエリアで、新たに18基の石灯籠と、手水鉢2基、狛犬1基で新たに江戸時代の石工銘を見つけることができた。その結果、住吉大社境内にある石工銘を有する近世石造物は、石灯籠53基・手水鉢2基・狛犬1基の合計56基となった（図3・表7～



図3 住吉大社境内にある石工銘を有する近世石造物の位置



※総数は『住吉大社史』下巻による

図4 住吉大社における石灯籠の年代別造立数

13)。石材は和泉砂岩製の石灯籠1基(25)以外全て花崗岩である。

56基の石造物のうち複数の石工による合作は、寛政4(1772)年に大坂石工の名田屋太郎兵衛と岡田屋治兵衛によって再建された1例(12)のみで、高野山奥之院の近世大名墓に比べ格段に少ない。56例の内訳は、大坂石工47例、泉州石工7例、摂州御影石工1例、京石工1例と、圧倒的に大坂石工が多い。住吉大社で確認されている石灯籠は624基とされており、石工銘の刻まれる比率は約8.5%と、1割に満たない。

住吉大社の近世石造物のうち大多数を占める石灯籠に関し、10年単位で時間的推移を検討した(図4)。住吉大社への石灯籠の奉納は約60~70年間隔の周期でピークがあり、最初にして最大のピークが享保年間にあったことが既に指摘されている(藤本前掲)。住吉大社における石工銘のある最古の石灯籠は、宝永7(1710)年に作られた泉州堺石工の大和屋久兵衛の作品(48)である。石工銘を有する石灯籠の増減は、およそ石灯籠全体の傾向に合致している。すなわち、最初にして最大のピークが1720年代にあり、その後1790年代と1850年代に再びピークが見られる。住吉大社では石工在銘石灯籠の出現時期にあたる1710年代には、前述の泉州堺石工大和屋久兵衛の作品(48)と享保3(1718)年の大坂石工御影屋吉右衛門の作品(1)の2基が確認された。続く1720年代には、泉州石工のもの2基に対して大坂石工のものは6基と多くなり、1760~1820年代には大坂石工の独占状態となる。1830年代以降、再び堺石工の作品が見られるようになるとともに、新たに摂州御影石工と京石工の作品が現れる。

次に大坂石工と泉州石工について個別に検討する。

【大坂石工】(表7~10)

大坂石工は出現順に、御影屋吉右衛門(1)、松屋甚兵衛(2)、御影屋七兵衛(3)、和泉屋五兵衛(4)、堺屋善兵衛(5)、灘屋(名田屋)五良兵衛(6・13)、難波屋九左衛門(7)、福嶋出雲(8)、御影屋治

表7 住吉大社にある大坂石工の作品(1)

No	大坂石工	年代	種類	高 cm	石材	願文等	奉納者
1	石工 御影屋吉右衛門	1718	石灯笼	335	花崗岩	永代常夜燈	備後福山 和泉屋三兵衛ほか 大坂 播磨屋吉兵衛ほか計9名
2	石大工 松屋甚兵衛	1720	石灯笼	335	花崗岩	永代常夜燈	備後福山 荷主中・舩持中 杉浦利次ほか計19名
3	石工 大坂 御影屋七兵衛	1720	石灯笼	375	花崗岩	永代常夜燈	大坂 薩摩堀 講中 成尾屋治郎兵衛ほか計18名 薩埵鹿児嶋客中
4	石工 大坂 和泉屋五兵衛	1723	石灯笼	240	花崗岩	永代常夜塔	大坂 富田屋吉兵衛 舩頭中 近江屋若之丞 舩頭中
5	石工 堺屋善兵衛	1727	石灯笼	339	花崗岩	永代常夜塔	奥州會津 羽州米澤 荷主中 堺荷問屋 石津屋清兵衛
6	石工 灘屋五良兵衛	1727	石灯笼	260	花崗岩	永代常夜塔 住吉大海神	大坂住吉講中
7	石大工 大坂 難波屋九左衛門	1728	石灯笼	320	花崗岩	永世常夜塔 住吉大神宮	講元紀州和歌山中谷九右衛門 駒屋又右衛門ほか計19名
8	石工 福嶋出雲	1731	石灯笼	320	花崗岩	永代常夜塔	小西長右衛門ほか計12名
9	石工 御影屋治兵衛	1733	石灯笼	237	花崗岩	永代御燈明	防州 宮竹三郎左衛門 礒部忠右衛門 三原屋新兵衛
10	細工所 大坂玉澤町住 伊豫屋又兵衛慶磧	1745	石灯笼	471	花崗岩	永代常夜塔	願主南部松前商客中 大坂 近江屋仁右衛門
11	大坂伏見堀 和泉屋仁右衛門	1746	石灯笼	325	花崗岩	永代常夜燈	諸國總網方中・總舩持中・總商人中 願主 大坂新天満橋 天満屋七郎兵衛 世話人中 代後浦 羆野小兵衛ほか計11名 睇テ浦 石田吉佐衛門ほか計8名 延岡 礒屋久平・礒屋権平 豊後國佐伯ほか36浦 阿波國海戸鞆浦 安藝國尾道 土佐國次崎浦・下弟浦 蒲城塩内浦 佐賀関口浦 紀州下津浦・毛見浦 日向國延岡ほか計5ヶ所 伊豫國岩城・吉田

執次	筆者	文献	備考
山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	2と対
山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	1と対
		住吉大社石燈籠図鑑	
		なし (20160628 関根確認)	
		住吉大社石燈籠図鑑	
		なし (20160628 関根確認)	
		天岸 1979 住吉大社石燈籠図鑑	石工銘は 20151016 関根発見
		なし (20160628 関根確認)	
山上金太夫		天岸 1979 住吉大社石燈籠図鑑	
舩松大小路	浪華筆塚菴花 翁潤書	天岸 1979 住吉大社石燈籠図鑑	
山上金太夫		天岸 1979 住吉大社石燈籠図鑑	

表8 住吉大社にある大坂石工の作品(2)

No	大坂石工	年代	種類	高 cm	石材	願文等	奉納者
12	長堀心さいばし石濱 石工 岡田屋治兵衛	1748	石灯籠	510	花崗岩	永代常夜塔	江戸住吉講中 丸合組
13	石工 大坂 名田屋五郎兵衛	1756	石灯籠	446	花崗岩	永代常夜塔 住吉大神宮	鹽飽廻船中
14	石工上町 大和屋三良兵衛	1756	石灯籠	360	花崗岩	永代常夜燈	小堀屋庄左衛門廻船中
15	石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎	1757	石灯籠	360	花崗岩	常夜塔	過書小三十石船頭中
16	石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎	1765	石灯籠	330	花崗岩	常夜塔	願主 大坂上口上荷舟茶舟拾五濱惣舟乗中 世話人 16名・通路人 15名
17	石工 大坂 和泉屋仁右衛門	1775	石灯籠	280	花崗岩	永代常夜燈	信濃屋勘四郎ほか計 8名
18	石工 西横堀 小嶋屋半兵衛	1779	石灯籠	(86)	花崗岩	常夜塔	久治米三郎ほか計 9名
19	石匠 長堀石濱 岡田治兵衛	1784	石灯籠	280	花崗岩	永代御神燈	紀州和歌山 山形屋五兵衛ほか計 13名
20	大坂上町 石般工 吉島六兵衛	1786	石灯籠	287	花崗岩	永代常夜塔 住吉大神宮	大阪庭講中 尾州内海廻船講中
21	石匠 長堀石濱 岡田治兵衛	1788	石灯籠	285	花崗岩	永代和光 寶前御燈	廻船中 呉田店
22	長堀 石工 岡田治兵衛	1789	石灯籠	370	花崗岩	常夜塔	長堀新仲買仲間 東堀組・天満組・東天満組・西天満組 播磨屋忠義兵衛ほか計 16名
23	長堀石濱 岡治	1793	石灯籠	460	花崗岩	常夜燈	道頓堀 新問屋 播磨屋兵助ほか計 13名
24	石工 大坂西横堀 小島屋半兵衛	1793	石灯籠	466	花崗岩	永代常夜塔	堂島 柳屋十兵衛ほか計 50名

執次	筆者	文献	備考
山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	寛政4年5月再建 世話人 江戸 大坂屋惣兵衛ほか計3名 大坂 金屋傳兵衛ほか計3名 高島吉兵衛ほか133名 石工 大坂長堀十町 名田屋太郎兵衛 同 丁 岡田屋治兵衛 嘉永6年晩春再修 丸合組 加賀屋徳平衛ほか計31名 石工 大坂西よこぼり 和泉屋仁右衛門 高木壽榮書
舩松大小路		住吉大社石燈籠図鑑	文久3年正月修復 施主 正重丸ほか計17船 世話人 尾上吉□ 宿 阿波□佐右工門
山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	石工銘は20151018関根発見
		なし(20160628関根確認)	
山上右源太夫		なし(20151019関根確認)	
		住吉大社石燈籠図鑑	
周旋 橋本光全		なし(20160628関根確認)	明治15年5月再建 台石のみオリジナル
山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	
山上宮門太夫	彦根前文學伏 水龍公美拜誌	天岸1979 住吉大社石燈籠図鑑	
山上金太夫	北渚吉敬謹書	住吉大社石燈籠図鑑	
沼間左内		住吉大社石燈籠図鑑	明治元年(1868)大坂石工泉四郎再建
山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	
山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	石工銘は20151016関根発見

表9 住吉大社にある大坂石工の作品(3)

No	大坂石工	年代	種類	高 cm	石材	願文等	奉納者
25	石工 大坂西堀 西川屋五郎兵衛	1796	石灯笼	220	和泉 砂岩	常夜塔 海上安全	荒物屋半兵衛ほか計6名
26	石工 大坂西横堀 小島屋半兵衛	1798	石灯笼	520	花崗岩	永代常夜塔	堂島 東組
27	石工 大坂西横堀 小島屋半兵衛	1798	石灯笼	490	花崗岩	常夜塔	大坂油町 北國積 木綿屋中21名
28	大坂西横堀炭屋町 石工 御影屋新三郎豊昌	1803	石灯笼	735	花崗岩	献燈	江戸 大坂 住吉講 江戸 大坂 日本橋釘店 鐵諸問屋中 大門通鐵店 鐵積問屋中 本船町鐵店 釘鐵積問屋中
29	大坂松屋町 石工 泉定	1804	石灯笼	310	花崗岩	永代常夜燈 御得意繁盛道 中無事	江戸 嶋屋佐右衛門 大阪 津國屋中右衛門
30	石工 御影屋新三郎	1807	石灯笼	423	花崗岩	永代常夜塔	願主 大坂津田店
31	大坂西横堀炭屋町 石工 御影屋新三郎	1810	石灯笼	268	花崗岩	奉献燈 海上安全	土州船問屋拾七軒 世話人 大治
32	大坂西横堀すみや町 石工 みかげや屋新三良	1812	石灯笼	610	花崗岩	常夜塔	さこは 魚問屋中 世話人 阿波屋卯兵衛 神崎屋善兵衛
33	石工 大坂西横堀炭屋町 御影屋新三郎昌興	1818	石灯笼	490	花崗岩	永代常夜塔	大坂藍屋中 世話人住吉講中
34	大坂西横堀 石工 小島屋半兵衛	1821	石灯笼	480	花崗岩	永代常夜塔	藝州廻船中 世話人 大坂 廣島屋平四郎ほか計9名 因之島椋之浦 大本屋六左衛門ほか計29名 大坂船問屋 鋸屋九兵衛ほか計9名 木谷浦 元屋万助ほか計5名 蒲刈浦 山本屋忠三郎 内海浦 工屋與兵衛 倉橋 怒和屋兵市・増屋半右衛門 三津庄 新屋倉次郎ほか計3名 与寄島 新屋伊助 竹原 久井屋儀三郎 大寄島 山本屋源四郎
35	石工 大坂西横堀炭屋町 御影屋新三郎	1823	石灯笼	353	花崗岩		古方嶋極印 富田屋四良五郎 桑名屋三四郎 松坂屋新三郎
36	大坂西横堀 石工 いよや市兵衛	1824	石灯笼	520	花崗岩	常夜塔	堂島 真組
37	大坂西横堀すみや町 みかげや新三郎	1830	石灯笼	560	花崗岩	永代常夜塔	阿州藍玉大坂積
38	大坂炭屋町 みかげや新三郎	1834	石灯笼	231	花崗岩	永代常夜塔 永代燈	願主 五組取次 沼間左内 大坂五組(上三口・川筋・堀々・安治川・ 木津川) 上荷茶船中・船乗中
39	大坂西横堀 石工 小島屋半兵衛	1847	石灯笼	375	花崗岩	常夜燈	大阪三郷攝河町在 古鍋古道具屋中
40	大坂西横堀炭屋町 石工 みかげや新三郎	1852	石灯笼	356	花崗岩	永代常夜塔	伏見方三拾石船頭中 河内屋六兵衛ほか計10名

	執次	筆者	文献	備考
			なし (20160628 関根確認)	
	山上金太夫		なし (20151019 関根確認)	
	山上宮門太夫		なし (20151019 関根確認)	大正4年10月と昭和5年に修理
	沼間佐内		なし (20151019 関根確認)	
	山上喜太夫	東都井上春蟻 書 落款銘	天岸 1979 住吉大社石燈籠図鑑	初寛文 11 年春
	山上松太夫		住吉大社石燈籠図鑑	石工銘は 20151018 関根発見
	山上茂太夫		住吉大社石燈籠図鑑	
	山上右源太夫		住吉大社石燈籠図鑑	
	舩松大小路		住吉大社石燈籠図鑑	
	舩松大小路		住吉大社石燈籠図鑑	
	舩松大小路		住吉大社石燈籠図鑑	石工銘は 20151018 関根発見
	田中直衛太夫		なし (20151019 関根確認)	昭和3年11月再建
	山上松太夫		なし (20151019 関根確認)	明治23年6月修理
			住吉大社石燈籠図鑑	享保4年(1719)造 天保5年再建
	田中直衛太夫		住吉大社石燈籠図鑑	
	山上要人太夫		住吉大社石燈籠図鑑	

表10 住吉大社にある大坂石工の作品(4)

No	大坂石工	年代	種類	高 cm	石材	願文等	奉納者
41	大坂西横堀炭屋町 石工 みかげや新三郎	1856	石灯笼	516	花崗岩	献燈	越中 締綿荷主廻船中 講元 木屋市郎兵衛ほか計 14名 世話人 酢屋善次郎ほか計 15名
42	大坂西横堀權右衛門町 石工 和泉屋四郎兵衛	1857	石灯笼	680	花崗岩	永代常夜塔	和州吉野郡木材商人中 大坂木材支配方 和泉屋平兵衛 世話人 3名
43	大坂西横堀炭屋町 石工 みかげや新三郎	1859	石灯笼	620	花崗岩	常夜塔 奉献	大坂 材木大問屋 世話方 大津屋作次良店満助 伊丹屋武兵衛
44	石工 巳かげや新三郎	1860	石灯笼	287	花崗岩	永代常夜塔	住吉村 12名 世話人 中辻町仁兵衛 今道町弥三七 発起人 山本富三郎ほか大坂・住吉の商人 計 17名
45	石工 大坂炭屋町 御影屋新三郎明尊敬	1863	石灯笼	未計測	花崗岩	長命燈	永壽講 大坂 22名・羽州山形 13名・羽州米沢 1 名・羽州大谷 1名・羽州天童 2名・羽州 秋田 1名・羽州岡岡 1名・尾州名古屋 1 名・濃州竹ヶ鼻 1名・京都 4名ほか 4名
46	石工 和泉屋源七	1775	手水鉢	61	花崗岩	奉献	江戸髪油問屋 願主 駿河屋喜平治 大坂屋孫八 駿河屋源七
47	石工 大坂船津橋北詰 泉屋治助	1810	手水鉢	57	花崗岩	奉献	上荷組合中 安治川四拾三濱親父分 21名

表11 住吉大社にある泉州石工の作品

No	泉州石工	年代	種類	高 cm	石材	願文等	奉納者
48	堺 石工 大和屋久兵衛	1710	石灯笼	272	花崗岩	永代常夜塔	船中 豊後國・筑前國・肥後國 願主 豊後屋次右衛門・豊後屋又七
49	堺 石工 大和屋久兵衛	1722	石灯笼	280	花崗岩	常夜燈	
50	石工 堺戎嶋 和泉屋長兵衛	1723	石灯笼	298	花崗岩	住吉宮拝前 永代常夜塔	西村喜兵衛ほか計 21名
51	石工 堺 和泉屋六右衛門	1755	石灯笼	345	花崗岩	常夜塔	堺渡海船持中
52	堺 石工 男里屋卯兵衛	1836	石灯笼	295	花崗岩	献燈	大阪塗師仲間
53	石工 堺湯屋町濱 代田屋新兵工	1853	石灯笼	373	花崗岩	常夜塔	堺網中 山崎長五郎ほか計 6名
54	堺 石工 男里屋市兵衛	1736	狛犬	271	花崗岩		堺講中 35名

表12 住吉大社にある御影石工の作品

No	御影石工	年代	種類	高 cm	石材	願文等	奉納者
55	御影 石工 白屋清三郎	1851	石灯笼	420	花崗岩	献燈	過書 大坂天道船持中 取締 吹田屋庄兵衛ほか計 3名 世話方老分 太田屋清兵衛・吉田屋卯兵衛

表13 住吉大社にある京石工の作品

No	京石工	年代	種類	高 cm	石材	願文等	奉納者
56	石工 洛東 白川村 源助	1836	石灯笼	570	花崗岩	献燈	京都紅花屋中 諸國紅花荷主中

執次	筆者	文献	備考
山上右源太夫		住吉大社石燈籠図鑑	明治23年(1890)再建
田中直衛太夫		なし(20151020 関根確認)	
山上松太夫 山上金太夫		住吉大社石燈籠図鑑	昭和2年3月移転(大阪材木市買問屋・大阪材木市場有志10名ほか5社) 石工銘は20151018 関根発見
沼間左内道興		住吉大社石燈籠図鑑	万延元年4月再建 村内安全 石工銘は20151018 関根発見
	八十五 貫名芭敬書	なし(20151019 関根確認)	
	三井親和書 山上有庭謹題	なし(20151020 関根確認)	
木村徳太夫		天岸 1979	

執次	筆者	文献	備考
			右側の石灯籠背面の銘文削除痕あり
		住吉大社石燈籠図鑑	
神奴蔵人		住吉大社石燈籠図鑑	
山上修禮太夫		なし(20151019 関根確認)	
橋本左膳太夫	唐山人書	なし(20151019 関根確認)	
山上修禮太夫		住吉大社石燈籠図鑑	
山上金太夫		なし(20151019 関根確認)	

執次	筆者	文献	備考
田中和佐太夫		住吉大社石燈籠図鑑	石工銘は20151018 関根発見

執次	筆者	文献	備考
田中和佐太夫		住吉大社石燈籠図鑑	石工銘は20151018 関根発見

兵衛 (9)、伊豫屋又兵衛慶積 (10)、和泉屋仁右衛門 (11・17)、岡田屋治兵衛 (12・19・21・22・23)、大和屋三良兵衛 (14)、御影屋新三郎 (15・16・28・30・31・32・33・35・37・38・40・41・43・44)、小嶋屋半兵衛 (18・24・26・27・34・39)、吉島六兵衛 (20)、西川屋五郎兵衛 (25)、和泉屋定七 (29)、伊豫屋市兵衛 (36)、和泉屋四郎兵衛 (42)、和泉屋源七 (46)、泉屋治助 (47) を確認し、さらに再建・修理工工として灘屋 (名田屋) 太郎兵衛 (12)、岡田屋治兵衛 (12)、和泉屋仁右衛門 (12)、泉四郎 (22) の 4 名を確認した。このなかで、高野山奥之院の大名墓も手掛けているのは、和泉屋仁右衛門・名田屋太郎兵衛・伊豫屋市兵衛の 3 名である。

ここでは、複数の作品を確認した石工について述べる。

管見によれば、西横堀を本拠とする灘屋 (名田屋) 五良兵衛の作品は、大阪市住吉区住吉町の大海神社にある享保12 (1727) 年銘の石灯籠 (奇多楼主人1934、天岸1979) が最も古く、大阪市淀川区東三国2丁目にある蒲田神社の天明5 (1785) 年銘の石灯籠 (天岸1979) まで 5 例を確認している。遠隔地では鳥取県倉吉市新町の大蓮寺にある豪商淀屋牧田家の墓所に名田屋五良兵衛作の墓標がある。また、香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮閨峠にある延享2 (1745) 年の石灯籠 (日本観光文化研究所編1984のW-235石灯籠) に刻まれた「大坂西横堀 灘屋五兵衛」は、居住地と年代から見て灘屋 (名田屋) 五良兵衛と同一人物と思われる。

伏見堀一丁目を本拠とする和泉屋仁右衛門については、高野山奥之院の項で既に触れており、そちらを参照されたい。

長堀心斎橋石浜を本拠とする岡田屋治兵衛の作品は、住吉大社の延享5 (1748) 年の石灯籠 (12) が最も古く、大阪府交野市私市の私市神社にある天保15 (1844年) 銘の狛犬 (木村1975) まで、約100年間にわたって13作品を確認しており、数代にわたって治兵衛を襲名していたと考えられる。岡田屋治兵衛の作品は、北は秋田市土崎の休宝寺にある寛政11 (1779) 年銘の石灯籠から、南は鳥根県益田市高津町の柿本神社にある寛政2 (1790) 年銘の狛犬 (木村1975) や、香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮大門内側にある文化9 (1812) 年銘の石灯籠 (日本観光文化研究所編1984のW-5石灯籠) まで広域に分布する。

西横堀炭屋町を本拠とする御影屋新三郎の作品は、大阪府貝塚市森の稲荷神社にある宝暦10 (1760) 年銘の石灯籠 (天岸1979) を最古に、住吉大社の文久2 (1863) 年銘の石灯籠 (45) まで、100年以上にわたって24例を確認しており、それらの銘文から、少なくとも豊高 (1760年代? ~90年代)、豊昌 (1800年代)、昌興 (1810年代~?)、明尊 (1860年代前後) の4名が歴代にわたり新三郎を襲名していたことが判明する。なお、大阪府寝屋川市大利町の大利神社にある明治21 (1888) 年銘の狛犬基壇の銘 (寝屋川市史編纂委員会2006) から、御影屋新三郎の家系は明治以降、飯田新三郎を名乗ったとみられる。香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮には、御影屋新三郎作の石灯籠2基 (日本観光文化研究所編1984のW-35石灯籠とW-294石灯籠)、寛政13年 (1801) 銘の鳥居がある。

西横堀新渡辺橋西詰を本拠とする小嶋屋半兵衛については、既に高野山奥之院の項で既に触れており、そちらを参照されたい。

【泉州堺石工】（表11）

堺石工としては、年代の古い順に、大和屋久兵衛(48・49)、和泉屋長兵衛(50)、男里屋市兵衛(54)、和泉屋六右衛門(51)、男里屋卯兵衛(52)、代田屋新兵衛(53)の6名の石工の作品を確認した。

管見によれば、泉州堺石工大和屋久兵衛の作品としては、大阪府岸和田市流木町の岸和田市墓苑(流木墓苑)内にある元禄15(1703)年銘の石仏六地藏(天岸1986a)が最も古く、大阪府南河内郡太子町の叡福寺にある寛延2(1749)年の宝篋印塔(天岸1986b)まで5作品が知られ、うち住吉大社には宝永7(1710)年例(48)と享保7(1722)年例(49)の2基がある。1770年代以降はちょうど久兵衛と入れ替わる形で、1830年代まで同じく堺石工大和屋庄兵衛の作品を大阪市住吉区・東住吉区、堺市、和泉市内で8例ほど確認しており、久兵衛の跡を庄兵衛が継いだ可能性が高い。

堺戎嶋を本拠とする和泉屋長兵衛の作品としては、兵庫県神戸市北区有馬町の温泉寺にある宝永8(1711)年銘の石灯籠(天岸1986b)が最も古く、春日大社にある嘉永2(1849)年銘の狛犬(天岸1986b)まで138年間で8作品が確認されることから、数代にわたり長兵衛を襲名していたと考えられる。

男里屋市兵衛の作品は、大阪府和泉市仏並町の上の宮にある元禄3(1690)年の鳥居(天岸1986a)が最も古く、大阪府松原市三宅の三宅天神社にある宝暦13(1763)年銘の狛犬(木村1970・1972)まで4作品が確認されている。奈良県桜井市の長谷寺には、男里屋市兵衛と男里屋卯兵衛が別々に手掛けた宝暦2(1752)銘の一对の石灯籠がある(仲1990)。両者は、18世紀半ばで重なり合いつつも年代的には市兵衛が卯兵衛に先行しており、市兵衛は卯兵衛の先代の可能性がある。

和泉屋六右衛門は、香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮の石灯籠(天岸1986b)にある「石工堺泉屋六右衛門」と同一人物と考えられる。

男里屋卯兵衛の作品は、奈良県桜井市初瀬の長谷寺にある宝暦2(1752)年銘の石灯籠(仲1990)が最も古く、天保7(1836)年銘の住吉大社の石灯籠(52)まで5作品を確認しており、年代的に前述した男里屋市兵衛より後出であることから、その後継者の可能性がある。

堺湯屋町濱を本拠とする代田屋新兵衛の作品は、大阪府堺市南区宮山台の多治速比賣神社にある文政11(1828)年銘の狛犬(木村1975)が最も古く、嘉永5(1853)年銘の住吉大社の石灯籠(53)まで6作品を確認している。

まとめ

本稿では近世石工に関する基礎的研究として手始めに、歴史が古く各地の近世石工の成立に関わった泉州石工と、最大規模の近世石工集団である大坂石工に焦点を当て、その作品が集中する高野山奥之院と住吉大社の石造物について検討した。

高野山奥之院にある巨大な五輪塔をはじめとする大名墓の造営は近世初期にはじまり、各地の近世城郭石垣の築造が下火となる寛永期以降、石垣普請と入れ替わる形で大規模公共事業化する。奥之院にある大名墓では、規模の大きな五輪塔を中心に1610年代から石工銘をもつ石造物がみられ

る。高野山奥之院における大名墓の造営を通して、寺社仏閣に奉納する宮物作りの石工が確立し、ブランド化した可能性がある。高野山奥之院の石塔造立は1610年代には泉州石工が担っていたが、1620年代には大坂石工が参入し、1640年代以降は大坂石工の独占状態が続く。

本稿では、大坂石工銘の分析から、高野山奥之院における近世大名家の石塔造立は、その時々で手掛ける石工が決まっており、大名家の選択の余地は限られていた可能性が高いことを導き出した。このことは、ある時期に高野山に特定の石工が滞在し、そこで大名家の石塔類の製作に従事していたことを強く示唆する。高野山奥之院の石塔類は、瀬戸内沿岸から海路で和歌山に運び、そこから九度山町慈尊院まで紀の川を遡った後、総勢72名もの人数で丸太の上を転がしながら山道を大門口まで運搬したとされる（日野西前掲）。海から標高約800mの高地まで人力で運びあげる必要があるため、途中で石塔類に傷がつく危険性が高い。実際、『紀伊名所図会』に掲載された石塔を運び上げている図で描かれているのは、中心に運搬用の丸太を差すための大きな丸い穴が穿たれた立方体の石材であり、細部加工は施されていない。山上まで運んだ後、一定期間高野山に滞在していた石工により注文書に従って石塔類の製作が行われたと考えられよう。大名墓に残された石工銘を見る限り、一人の石工が高野山に滞在する期間は長くても数年で、頻繁に交替していたとみられる。

石工の職名は、泉州石工・大坂石工ともに当初は「石大工」であったが、17世紀中葉には様々な呼称が使われた後、17世紀後半には次第に「石工」に統一されていく。また、高野山奥之院で大名墓の石塔類製作に関わった石工は、奥之院での巨大な大名墓造立が下火となる1690年代以降は奥之院の大名墓以外の作品も手掛け、それらに銘を記すようになる。

一方、住吉大社では1710年代から石灯籠の奉納が始まり、1720年代には最初にして最大のピークを迎える。1710～20年代に奉納された石灯籠は泉州石工と大坂石工のものが併存するが、1760～1820年代には大坂石工の独占状態となる。再び堺石工の作品が見られるようになった1830年代以降には新たに摂州御影石工と京石工の作品が現れる（表12・13）。

慶長年間後半に始まる高野山奥之院の大名墓所での大型石塔類の製作は、元和偃武により城郭石垣の受注量が減少する寛永期以降、畿内の石工集団にとって極めて魅力的な仕事となったであろう。高野山奥之院で全国の大名家が大型の墓塔を競い合うように次々と造営し始めたことにより、泉州石工と大坂石工が互いに石塔類製作技術を切磋琢磨し、ミヤモノやカタモノなど石造物の製作を専門とする石工が確立した可能性が高い。そのことは彼ら自身の呼称が石垣から墓石まで多様な仕事を請け負う「石大工」から石造物製作に特化した「石工」に変わったことにも表れている。高野山奥之院は泉州石工や大坂石工の高い技術力を全国に示す「展示場」の役割を果たし、その結果、彼らの一部が各地に分散する形で、江戸をはじめとして各地に近世石工が誕生した可能性を指摘しておきたい。また、海運関係者や商工業者による住吉大社への石灯籠の奉納は、大名家による高野山奥之院での大規模石塔類の造営が幾分沈静化した18世紀以降、泉州石工や大坂石工にとって、それに代わる大きな仕事となったに違いない。それは元禄期を境として石造物の主たる発注主が武家から商工業者になったことをも象徴していよう。

本論を執筆するにあたり、北陸石仏の会の尾田武雄氏、阪南市の三好義三氏、鳥根県地学会の永井泰氏には文献収集で、高野町教育委員会の木本誠二氏には地図の提供に関して、それぞれお世話になった。また院生の木戸奈央子さんには分布図の作成をお手伝いいただいた。末筆ではありますが感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費 JP26244044の助成を受けたものです。

【註】

- 1) 高野町教育委員会の木本誠二氏によれば、高野山奥之院にある近世大名墓の悉皆調査報告が平成30年度に刊行される予定とのことである。
- 2) 新たに筆者が石工銘を発見した大名墓は、美濃国加納藩初代藩主奥平信昌の五輪塔（表3-51）と上野国高崎藩2代藩主安藤重長の五輪塔（表3-52）の2基である。反対に天岸氏が石工銘のある大名墓として挙げているもののうち、下記のもの石工銘を確認できなかったため、今回の分析からは除外した。
 - ・紀伊国和歌山藩2代藩主浅野長晟墓
 - ・出羽国久保田藩初代藩主佐竹義宣墓
 - ・陸奥国盛岡藩4代藩主南部行信正室清浄院墓
 - ・陸奥国盛岡藩3代藩主南部重信墓
 - ・陸奥国盛岡藩4代藩主南部行信墓
 - ・陸奥国盛岡藩5代藩主南部信恩墓
 - ・陸奥国盛岡藩6代藩主南部利幹墓
- 3) 管見によれば、住吉大社の石造物に関する最もまとまった研究は、藤本利治氏による石灯籠の分析である（藤本1992）。藤本氏は関係者から提供を受けた『住吉神社石燈籠調書』に基づき、寛永2年（1644）から昭和50年（1975）までに住吉大社に奉納された610基の石灯籠に関して、時期、奉納者の職種・階層・地理的分布を検討し、住吉信仰が、蝦夷（松前）から薩摩まで、商品流通の活発化によって景気変動や自然災害とくに気象の影響を受けて盛衰を遂げながら、米を中心に各地の特産品から生活資材まで海運によって盛んに運送されていたことを示しており、その海上安泰を祈ったものであると結論付けた。
- 4) <http://isitourouzukan.web.fc2.com/index.html>
2017年5月末の段階で、同サイトの石灯籠に関する最新データは2015年9月2日のものであり、それ以降更新されていない。

【引用・参考文献】

- 天岸正男 1972「奥院石工名集録」『史迹と美術』42(7)、258-286頁、史迹・美術同攷会
- 天岸正男 1979「大坂三郷の石工」『歴史考古学』3、15-27頁、歴史考古学研究会
- 天岸正男 1986a「和泉国近世石工資料」『歴史考古学』17、11-36頁、歴史考古学研究会
- 天岸正男 1986b「摂津・河内両国および周辺の近世石工資料」『歴史考古学』18、4-20頁、歴史考古学研究会
- 池尻篤 2006「埼玉県東部における近世石工の展開：石工銘からみた在地石工の出現」『駒沢考古』33、55-80頁、駒沢大学考古学研究室
- 池尻篤 2008「近世江戸石工製品の流通—埼玉県内の石工銘資料を事例として—」『生産の考古学』Ⅱ、391-410頁、倉田芳郎先生追悼論文集編集委員会、同成社

- 石川博司 1978「石工に想う」『日本の石仏』8、94-99頁、木耳社
- 石燈籠平成調査会 2003「春日大社石燈籠平成調査の概要」『奈良学研究』6、85-108頁、帝塚山大学奈良学学会
- 磯辺ゆう 2007「丹波佐吉の狛犬1—記載」『奈良文化女子大学紀要』38、19-30頁
- 磯辺ゆう 2008「丹波佐吉の石造物とその一生」『奈良文化女子大学紀要』39、1-38頁
- 伊藤重信 1987「石造物に現れた石工たちⅠ」『日本の石仏』43、2-15頁、国書刊行会
- 入江來布 1931「燈籠(住吉襍筆)」『上方』10下(123)、32-42頁、上方郷土研究会
- 植松森一 1979「信州高遠石工銘覚書」『日本の石仏』9、66-68頁、木耳社
- 梅原忠治郎 1931「宮幣大社住吉神社の石燈籠」『上方』2(上)15、35-38頁、上方郷土研究会
- 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1983『国東半島の石工〈1〉』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
報告1
- 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1984『国東半島の石工〈2〉』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
報告2
- 大塚省悟 1977「上州の高遠石工作品」『日本の石仏』3、58-71頁、木耳社
- 大塚省悟 1978「主尊を失った台石は語る—高遠の石工たち—」『日本の石仏』8、100-102頁、木耳社
- 大西嘉彰 2002「南都春日大社石燈籠と石工考」『日本の石仏』104、4-22頁、青娥書房
- 大村稲三郎 1978「東京付近の伊那石工作品」『日本の石仏』8、86-90頁、木耳社
- 大村稲三郎 1979「東京付近の伊那石工作品『追加』」『日本の石仏』9、59-61頁、木耳社
- 大村稲三郎 1983「東京付近の伊那石工作品—再追加—」『日本の石仏』24、93-96頁、木耳社
- 大脇正一 1931「住吉神社鷲笠の石燈籠」『上方』2(下)19、72-73頁、上方郷土研究会
- 尾田武雄 1996「富山県内の「石工銘の石造物」一覧」『北陸石仏の会研究紀要』創刊号、39-44頁
- 尾田武雄 1998「富山県内の「石工銘の石造物」一覧補遺1」『北陸石仏の会研究紀要』2、70-83頁
- 尾道市教育委員会 2014『尾道の石造物と石工』尾道市文化財調査報告書
- 春日太郎 1981「高遠の石工」『日本の石仏』17、44-49頁、木耳社
- 勝部明生編 2010『石清水八幡宮 石燈籠の調査研究』龍谷大学文化財学実習講座
- 嘉津山清 2000a「「重關茶場碑」と「奉神楽之碑」その他について(上)」『埼玉史談』46-4、16-23頁、埼玉県郷土
文化会
- 嘉津山清 2000b「「重關茶場碑」と「奉神楽之碑」その他について(下)」『埼玉史談』47-1、43-52頁、埼玉県郷土
文化会
- 嘉津山清 2001「本門寺の石経碑その他 石匠窪世祥について」『大田区立郷土博物館紀要』11、7-23頁
- 嘉津山清 2003「「濃華経一千部読誦碑記」と中慶雲」『埼玉史談』50-3、39-50頁、埼玉県郷土文化会
- 嘉津山清 2004「碑銘彫刻師 宮龜年」『歴史考古学』54、54-77頁、歴史考古学研究会
- 嘉津山清 2007a「三学院と和学備神社の宝篋印塔(上)」『埼玉史談』53-4、44-52頁、埼玉県郷土文化会
- 嘉津山清 2007b「三学院と和学備神社の宝篋印塔(下)」『埼玉史談』54-1、38-40頁、埼玉県郷土文化会
- 嘉津山清 2016『江戸前の石工窪世祥』第一書房
- 加藤勝丕 2003「江戸の石匠 廣群鶴 歴代御碑銘彫刻師」『日本の石仏』105、30-39頁、青娥書房
- 金森敦子 1978a「旅する石工たち」『日本の石仏』5、82-87頁、木耳社
- 金森敦子 1978b「江戸社会における石工の位置」『日本の石仏』8、64-71頁、木耳社
- 金森敦子 1979「石工聞き書き 美濃の町石屋—岐阜県大垣市」『日本の石仏』9、60-65頁、木耳社
- 金森敦子 1980「和泉石工—近世における移住についての考察—」『日本の石仏』14、25-37頁、木耳社
- 金森敦子 1983「石の笛—丹波佐吉のこと—」『日本の石仏』28、67-79頁、国書刊行会
- 金森敦子 1985「小林源之助と群鳳父子のこと—越後柏崎石工—」『日本の石仏』33、41-50頁、国書刊行会

- 川勝政太郎 1939『石造美術』一條書房
- 元興寺文化財研究所 1982『高野山発掘調査報告書』考古学研究室調査報告 3
- 木下浩良 2014『戦国武将と高野山奥之院一石塔の銘文を読む』朱鷺書房
- 奇多楼主人 1934「徳川期に於ける大坂の石屋」『上方』38、48-50頁、上方郷土研究会
- 木村茂 1970「大阪近郊の石製狛犬の研究(1)」『大阪教育大学紀要(人文科学)』19、163-180頁
- 木村茂 1971「大阪近郊の石製狛犬の研究(2)」『大阪教育大学紀要(人文科学)』20、99-116頁
- 木村茂 1972「大阪近郊の石製狛犬の研究(3)」『大阪教育大学紀要(人文科学)』21、72-93頁
- 木村茂 1975「大阪近郊の石製狛犬の研究(4)」『大阪教育大学紀要(人文科学)』24(2)、113-132頁
- 木村茂 1977「大阪近郊の石製狛犬の研究(5)」『大阪教育大学紀要(人文科学)』26(3)、25-34頁
- 計良勝範 2002「佐渡島の石工在銘資料—江戸時代—」『日本の石仏』104、23-36頁、青娥書房
- 高野山町史編纂委員会 2012『高野町史 民俗編』
- 小滝清次郎 1978「南会津の伊那石工作品」『日本の石仏』8、91-93頁、木耳社
- 小松光衛 1978「石工・守屋貞治と伊那石工」『日本の石仏』8、80-85頁、木耳社
- 小松光衛 1979「伊那石工を追って—一身延から駿河へ—」『日本の石仏』9、54-58頁、木耳社
- 小松光衛 2001「石工研究25年の到達点と展望」『日本の石仏』99、41-45頁、青娥書房
- 金野亜希良編 1984『高野山戦国大名之墓碑』日本史古跡研究会
- 斉藤正義 1978「埼玉県蕨市の近世石工とその作品」『日本の石仏』8、103-106頁、木耳社
- 坂本亮太 2016「文献史料からみる高野山への納骨」『季刊考古学』134、30-33頁、雄山閣
- 狭川真一 2016「石塔の造立と納骨信仰」『季刊考古学』134、21-24頁、雄山閣
- 佐々木利三 1931a「住吉神社の石造美術」(『上方』10(下)122、24-27頁、上方郷土研究会)
- 佐々木利三 1931b「再び住吉神社の石造美術に就て」(『上方』復刻版 10(下)123、42-43頁)
- 佐野精一 1978「近世・京石工の系譜」『日本の石仏』8、54-63頁、木耳社
- 曾根原駿吉郎 1969『貞治の石仏—幻の石工を求めて—』講談社
- 曾根原駿吉郎 1980「諏訪石工山田平蔵」『日本の石仏』15、91-94頁、木耳社
- 滝本靖士 1999「富山県内の「石工銘の石造物」一覧」新規追加(補遺)2『北陸石仏の会研究紀要』3、50-51頁
- 田中井洋介 2005「伊勢国千種村の石工忠右衛門の銘を持つ近江所在の石灯籠二例」『滋賀県地方史研究』15、23-38頁
- 田中井洋介 2006「湖東地域の石工に関する研究ノート—愛知川町域に所在する二例の石工銘から—」『滋賀県地方史研究』16、27-33頁、滋賀県地方史研究家連絡会
- 田中井洋介 2007a「近世後期みおける近江の石工についての研究ノート—蒲生郡七里村の石工「金三郎」とその周辺—」『考古学論究』1271-1279頁、小笠原好彦先生退任記念論集刊行会
- 田中井洋介 2007b「近江の石工たち—江戸時代後期を中心に—」『紀要』15、1-8頁、滋賀県立安土城考古博物館
- 田中井洋介 2008「甲賀の石工についての研究ノート」『紀要』16、1-8頁、滋賀県立安土城考古博物館
- 田中井洋介 2009「大津市域における近世の石工たち」『紀要』22、71-75頁、滋賀県文化財保護協会
- 高遠町教育委員会編 2005『再発見! 高遠石工』ほおずき書籍
- 巽三郎・愛甲昇寛編 1974『紀伊國金石文集成』南紀考古同好会
- 巽三郎・愛甲昇寛・小賀直樹編 1995『紀伊國金石文集成—続編—』
- 棚橋淳二・井上暁子 1978「住吉大社の「玉栄講」石灯籠」『GLASS』5、11-26頁、ガラス工芸研究会
- 大護八郎 1978「石工研究への私見」『日本の石仏』8、6-13頁、木耳社
- 大護八郎 1987「「石屋と石材」協会研究の10年の歩み」『日本の石仏』43、38-44頁、国書刊行会
- 所功ほか 1983『住吉大社史下巻』、住吉大社奉賛会

- 飛田範夫 2003「都市における植物文化—江戸時代の大坂— 8 大坂の石屋」『グリーン・エージ』360号、32-35頁、
 (財)日本緑化センター
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2012『富山市内石造物等調査報告書』
 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2013『富山市内石造物等調査報告書』Ⅱ
 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2014『富山市内石造物等調査報告書』Ⅲ
 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2015『富山市内石造物等調査報告書』Ⅳ
 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2016a『富山市内石造物等調査報告書』Ⅴ
 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2016b『富山藩主前田家墓所長岡御廟所石造物調査報告書』
- 仲芳人 1987「石工「佐保の庄 儀助」を追って」『日本の石仏』43、33-37頁、国書刊行会
 仲芳人 1990「奈良県の「和泉石工」資料」『撰河泉文化資料』41、42-45頁、撰河泉地域文化研究所
 仲芳人 1999「奈良県の近世石造狛犬」『歴史考古学』44、28-41頁、歴史考古学研究会
- 永井泰・齋藤正 2014『島根の石造物データ』
- 長田光男 1979「大和の獅子・狛犬」『桜井女子短期大学紀要』21、1-21頁
- 奈良文化財同好会 1983『狛犬の研究—奈良市内に現存する狛犬について—』
 奈良文化財同好会 2012『狛犬の研究—奈良市周辺の狛犬—』
- 寝屋川市史編纂委員会 2006『寝屋川市史』2
- 日本観光文化研究所編 1984『金毘羅庶民信仰資料集』3、金刀比羅宮社務所
- 日野西眞定 1990『高野山民族誌 奥の院編』佼成出版社
- 藤本利治 1992「住吉信仰の一考察—奉納石燈籠からみた—」『皇學館大學紀要』30、45-60頁、皇學館大学
- 古川知明 2011a「常願寺川石工甚右衛門について」『富山史壇』164、17-34頁、越中史壇会
 古川知明 2011b「常願寺川石工製作石仏研究の課題と展望」『北陸石仏の会研究紀要』10、1-9頁、
 古川知明 2011c「神通川石工とその周辺—近世石工と在地石材—」『大境』30、59-74頁、富山考古学会
 古川知明 2012a「常願寺川石工牧喜右衛門について」『富山市考古資料館紀要』31、15-44頁
 古川知明 2012b「富山県東部における近世石造物研究—主に石工研究から—」『北陸の石造物—研究の現状と課題—』194-204頁、石造物研究会第13回研究会資料集
- 古川知明 2012c「常願寺川石工中嶋栄蔵について」『富山史壇』168、26-41頁、越中史壇会
- 古川知明 2013「常願寺川石工北野甚蔵について」『大境』32、57-74頁、富山考古学会
- 古川知明 2014「富山町石工伝助について」『富山市の遺跡物語』16、45-48頁、富山市埋蔵文化財センター
- 降矢哲男 2016「高野山奥之院への納骨」『季刊考古学』134、17-20頁、雄山閣
- 米田彌太郎 1983「住吉大社石燈籠の書」『すみのえ 23(1)〈179〉』、13-21頁、住吉大社社務所
- 望月友善 1978「中世の石大工」『日本の石仏』8、21-53頁、木耳社
- 山之内喜七 1982「信州高遠石工と越後小平尾石工」『日本の石仏』23、75-81頁、木耳社
- 渡辺菊治 1987「仙台の石工とその流れ」『日本の石仏』43、24-28頁、国書刊行会